
『ボルネオ新聞』（1942-45）のマレー／インドネシア語における形態法についての覚書

稲垣 和也

Abstract

This paper discusses the linguistic aspects of Malay/Indonesian used in *Borneo Simboen*, a newspaper published from 1942 to 1945 by Boruneo Shimbunsha. In addition to general descriptions of the spelling and morphology of the language, this paper demonstrates that most features of modern Indonesian, along with some features of modern Malay, can be traced back to the language used in the Malay/Indonesian pages of the newspaper. On the other hand, by looking into the journalistic features of the analyzed texts, this paper indicates that the morphological notation for reduplication, abbreviation, and clipping tends to conform to two antagonistic principles, namely the ones of economy and transparency. Space-consuming and frequent words or phrases are reduced in accordance with the economy principle, whereas less recoverable and infrequent ones are transcribed faithfully to respective citation (‘dictionary’) forms in accordance with the transparency principle. Furthermore, this paper shows that it is highly useful to classify abbreviations on the basis of such properties as presence/absence and type of notational variation.

1. はじめに

大東亜・太平洋戦争の中、1941年から1942年にかけて、日本はボルネオに侵攻する。当時、ボルネオ北部は英領、ボルネオ南部は蘭領であった。日本軍は、1942年1月24日にバリックパパン（東部）、同年1月29日にボ

ンティアナック（西部），同じく同年2月10日にバンジャルマシン（中部¹⁾）を占領した（Ooi Keat Gin 2011: 37 を参照）。

1942 年 12 月 8 日から，朝日新聞社を親会社とするボルネオ新聞社が『ボルネオ新聞』（中部版；Ooi Keat Gin 2011: 81 によると，当初の新聞名 *Kalimantan Raya* が改称を経た）をバンジャルマシンで発行し始める。1943 年 4 月 29 日には，『ボルネオ新聞』（東部版）がバリックパパンで創刊され，1943 年 8 月 1 日に同・西部版がポンティアナックで創刊される。これらは，日刊で 1945 年 9 月まで 3 年以上発行され続ける（早瀬 2018a: 1 を参照）。

富塚（2002: 128）によると，21 世紀初頭まで，(i)『東部版』は国立国会図書館のマイクロフィルムで閲覧できたが²⁾，(ii)『中部版』および (iii)『西部版』は，朝日新聞大阪本社社史編集室を訪ねることなしに閲覧することが困難だった。2018 年，特に『中部版』が充実した『ボルネオ新聞』（復刻版，早瀬 2018b）が出版された。

蘭領東インドにおいて日本語で発行されていた『爪哇日報』『日蘭商業新聞』『東印度日報』といった日本語新聞と違い，『ボルネオ新聞』は，日本語とマ



図 1：ボルネオ新聞のマレー／インドネシア語紙面
（左：西部版，中：中部版，右：東部版，早瀬 2018b）

レー／インドネシア語、および中国語（西部版のみ）の紙面を持っていた³⁾。以下では、特にマレー／インドネシア語の紙面を指すために、例えば『中部版』の紙面であれば“*Borneo Simboen*（中）”のような表記を用いる⁴⁾。*Borneo Simboen*の紙面の年は皇紀（*Koki*）表記であり、2602-2604（＝1942-1944年）の期間の発行が確認できる。日本語版では「昭和」が使われている。

以下、第2節では、当時の音韻について探るため、綴り字およびその変異について記述をおこなう。第3節では、形態法として、接辞添加、重複、複合、省略による語形成について記述をおこなう。

2. 綴り字

*Borneo Simboen*では、いわゆる「旧綴り」と呼ばれる、1901年のファン・オプハイゼンによるムラユ語正書法が使われている。*/e/*と*/ə/*の2音素はアルファベットの〈e〉1字で綴られる。以下の表1にそのほかの綴り方と音素の対照を示す。

表1：*Borneo Simboen*におけるアルファベット

<i>Borneo Simboen</i>	現代の綴り	音素	<i>Borneo Simboen</i>	現代の綴り	音素
<i>i</i>	i	/i/	<i>p, t</i>	p, t	/p, t/
<i>e</i>	e	/e/	<i>k/q</i>	k(/q)	/k/
<i>a</i>	a	/a/	<i>b, d, g</i>	b, d, g	/b, d, g/
<i>ə</i>	e	/ə/	<i>tj</i>	c	/č/
<i>o</i>	o	/o/	<i>dj</i>	j	/j/
<i>oe</i>	u	/u/	<i>v, f</i>	v, f	/f/
			<i>ch</i>	kh	/x~h/
<i>ai</i>	ai	/ay/	<i>sj</i>	sy	/š/
<i>au</i>	au	/au/	<i>s, h</i>	s, h	/s, h/
			<i>m, n, ng</i>	m, n, ng	/m, n, ŋ/
			<i>nj</i>	ny	/ñ/
			<i>l, r</i>	l, r	/l, r/
			<i>w</i>	w	/w/
			<i>j</i>	y	/j/
			.	—	/ʔ/

〈oe〉は2字で1音 /u/ をあらわすが、〈ai〉〈au〉は2字で2音に相当する二重母音 /ay, aw/ をあらわす。/aw/ が aoe と綴られることはない（母音連続 /a.u/ であれば aoe と綴られる。例：maoe 「欲する」）。また、現代綴りでは使われない、旧綴りの2字1音に〈tj〉と〈dj〉があり、これらはそれぞれ無声と有声の歯茎硬口蓋破擦音 /č/ と /j/ をあらわす。これらの第2字にあたる〈j〉は、単独で硬口蓋接近音 /j/ をあらわし、〈sj〉と〈nj〉の第2字にも使われる。〈sj〉も〈nj〉も2字1音であり歯茎硬口蓋の摩擦音と鼻音 /ʃ, ñ/ をあらわす。加えて、アポストロフィ〈'〉が声門閉鎖音 /ʔ/ をあらわす。

Borneo Simboen には、とりわけ借用語において、現代の語の綴りと一致するもの／しないものがあり、表記に揺れがある。当時の発音にも揺れがあったといっていよい。とりわけ、母音の例としては以下のような表記の変異が見られる（現代インドネシア語の表記を付記する）。

(1)	〈i〉:	<i>tilpon</i>	「電話」	(telepon)
	〈e〉:	<i>tentera</i> ⁵⁾	「軍」	(tentara)
		<i>peradjoerit</i>	「軍人」	(prajurit)
		<i>paberik</i>	「工場」	(pabrik)
		<i>semoedera</i>	「大洋」	(samudra)
	〈a〉:	<i>mareka</i>	「彼ら」	(mereka) ⁶⁾
	〈o〉:	<i>berobah</i>	「変わる」	(berubah)
		<i>kebon</i>	「農園」	(kebun)
	〈oe〉:	<i>moesti</i>	「(義務 / 当然)」	(mesti)
		<i>koeatir</i>	「心配だ」	(khawatir)
	〈au〉:	<i>tanladan</i>	「模範」	(teladan)
		<i>anggota</i>	「メンバー」	(anggota)

特に、*koeatir* 「心配だ」には、*chawatir* の表記もあり、他にも *kenatir* や

bawatir などが散見される。語末第三位の母音に〈oe〉〈a〉〈e〉の変異が見られることから、音韻論的な変異があったと推測される⁷⁾。

次に子音の例を見る。まず、現代の表記法に無い、アポストロフィの使用が目立つ。例えば、*Borneo Simboen* には、*ta'*「(用言否定)」(*tak*)、*ja'ni*「即ち」(*yakni*)、*ra'jat*「国民」(*rakyat*)、*ma'loemat*「布告」(*maklumat*) 等がある。ただし、これらの表記も揺れており、括弧内の現代表記のように〈k〉で書かれていることも多い(音節頭子音として〈ʾ〉を持つ、*'alim*「敬虔な」(*alim*)、*djoem'at*「金曜日」(*Jumat*)、*sj'a'ir*「シャイール詩」(*syair*) 等は、〈k〉ではなく〈無表記〉との間で揺れる)。

そのほかの子音および音節では、例えば以下のような表記の変異が見られる。

(2)	〈th〉:	<i>bathin</i>	「心, 内面」	(<i>batin</i>)
	〈q〉:	<i>goerban</i>	「犠牲者」	(<i>kurban</i>)
	〈c〉:	<i>pereconomian</i>	「経済活動」	(<i>perekonomian</i>)
	〈f〉:	<i>fihak</i>	「側」	(<i>pihak</i>)
		<i>fikir</i> ⁸⁾	「考え」	(<i>pikir</i>)
	〈s〉:	<i>termasboer</i>	「有名な」	(<i>termasyhur</i>)
	〈sj〉:	<i>insjaf</i> ⁹⁾	「自覚した」	(<i>insaf</i>)
	〈ng〉:	<i>semangkin</i>	「次第に」	(<i>semakin</i>)
	〈ha〉:	<i>babaroe</i>	「新しい」	(<i>baru</i>)
		<i>bahagian</i>	「部分」	(<i>bagian</i>)
		<i>sahadja</i>	「～だけ」	(<i>saja</i>)
	〈y/j〉:	<i>ksatrya</i> ¹⁰⁾	「戦士」	(<i>kesatria</i>)
	〈w〉:	<i>wang/oeang</i>	「お金」	(<i>uang</i>)
		<i>kowé/koeé</i>	「菓子」	(<i>kue</i>)

tentera の第二音節の〈e〉, *fikir* の〈f〉, *babaru* 等の〈ha〉, *wang* の〈w〉などは、

現代のマレーシアの綴りに対応する表記だが、おおむね現代インドネシア語に通ずる綴り方が基本となっている。したがって、*Borneo Simboen* では、インドネシア綴りにマレーシア綴りが混在しているとみなすことができる。

3. 形態法

3.1 接辞添加 I：動詞や動詞語基を作る機能

接頭辞 *ber-* および *meN-* が語基を動詞化する。これらの *r* および *N* の形態音韻論的交替については、現代インドネシア語のそれと大差ない。

- | | | | | |
|-----|-------------------|---------|---|--|
| (3) | <i>berlajar</i> | 「航行する」 | = | <i>ber-</i> + <i>lajar</i> 「帆」 |
| | <i>bersatoe</i> | 「一丸となる」 | = | <i>ber-</i> + <i>satoe</i> 「一」 |
| | <i>bertjahaja</i> | 「輝く」 | = | <i>ber-</i> + <i>tjahaja</i> 「輝き」 ¹¹⁾ |
-
- | | | | | |
|-----|--------------------------------|---------------|---|-----------------------------------|
| (4) | <i>membentoeke (soesoenan)</i> | 「(組織を) 創設する」 | = | <i>meN-</i> + <i>bentoeke</i> 「形」 |
| | <i>memetik (borens)</i> | 「(ほうれん草を) 摘む」 | = | <i>meN-</i> + <i>petik</i> 「(摘)」 |
| | <i>menjerang (Asia Timoer)</i> | 「(東亜を) 攻撃する」 | = | <i>meN-</i> + <i>serang</i> 「(攻)」 |

接頭辞 *di-* によって *meN-* 動詞が受動化される。

- | | | |
|-----|----------------------------------|-------------------|
| (5) | <i>dibentoeke (satoe Komite)</i> | 「(ある委員会が) 創設される」 |
| | <i>(maslahat) dipetik</i> | 「(益が) 摘み取られる」 |
| | <i>(Guadalcanar) diserang</i> | 「(ガダルカナルが) 攻撃される」 |

1/2/3 人称代名詞（相当語句）を使って人称受動の形式が作られる¹²⁾。

- | | | |
|-----|-------------------------------|-------------------------|
| (6) | <i>(baroes) kita bentoeke</i> | 「我々によって創設され (なければならない)」 |
|-----|-------------------------------|-------------------------|

- (*basiljig kamoe petik*) 「君によって摘み取られ (た農産物)」
 (*telah mereka serang*) 「彼らによって攻撃され (た)」

接頭辞 *ter-* により、被動者を主語とする受動的な動詞が作られる。

- (7) (*tentera moesoeh terkepoeng*) 「(敵軍が) 包囲される」
 (*terantjam oleh babaja maoet*) 「(死の危険に) さらされる」
 (*terjadi pertemporan*) 「(戦闘が) 起こる (← 起こされる)」

実際の記事の中で、上の各々の動詞形式はどれほどの使用頻度だろうか。試しに、*Borneo Simboen* (中：1944年3月30日) の文章内の主節における各述部を見出しを除いて数えたところ、表2のような結果となった。なお、「基語動詞」というのは、語基のみから成り、形態統語論的に動詞として振る舞うタイプの動詞である(形容詞等と形態統語論的に振る舞いが異なる)。また、「その他」に分類した述部には、名詞、形容詞、数詞、助動詞、副詞、疑問詞、前置詞句、重複語などが含まれる。

表2から、*meN-*動詞とその受動を主節述部とする文が半数以上を占めていることが分かる。ジャーナリズムの文体では、(i) より多くの項を関連付

表2：*Borneo Simboen* (中：1944/3/30) における主節述部の使用頻度

	第1面		第2面		合計	
基語動詞	9	(9%)	16	(12%)	25	(11%)
<i>ber-</i> 動詞	11	(11%)	14	(11%)	25	(11%)
<i>meN-</i> 動詞	41	(41%)	46	(34%)	87	(37%)
受動形式	19	(19%)	26	(19%)	45	(19%)
<i>ter-</i> 動詞	9	(9%)	0	(0%)	9	(4%)
その他	11	(11%)	32	(24%)	43	(18%)
合計	100		134		234	

けつつ、(ii) 性質や状態よりも行為に関する情報が多く詰め込まれる。そのため、2 項以上を関連付けることができ、かつ、おおむね行為をあらわす、meN- 動詞およびその受動の述部が頻出するのだと考えられる。

また、第 1 面に比べ、第 2 面では「その他」(および「基語動詞」)の述部の使用頻度が高い。これは、第 2 面にある文化欄において一般的な文体が使用されていることに起因している。

動詞を作るほかの接頭辞に *memper-* がある。*memper-* は使役動詞を作る。

- (8) *memperkoeat (tenaga perang)* 「(戦力を) 強化する」 = *memper-* + *koeat* 「強い」
memperloas (bahasa Nippon) 「(日本語を) 広める」 = *memper-* + *loas* 「広い」
memperoleh (hasil) 「(成果を) 獲得する」 = *memper-* + *oleh* 「によって」

接尾辞 *-kan* も使役／他動化の機能を持つ。以下の (9) には人称受動や命令の形式を挙げているが、多くの場合、*meN-* や *memper-* が添加された形式が使われる。

- (9) *adakan (satu rapat)* 「(ある会議を) おこなう」 = *ada* 「有る」 + *-kan*
naikkan (bendera) 「(旗を) あげる」 = *naik* 「あがる」 + *-kan*

頻度は高くないが、*-kan* には受益 (10) や道具 (11) といった適用の機能もある。

- (10) [...] *ia membawakan kita beras, pisang dan [...]*
「彼 (= 酋長) は米, バナナ, (…) を私達のために持ってきてくれ (…)」

(Borneo Simboen 東: 1943/8/3 第 2 面)

- (11) [...] *Al Tharik bin Zijjad jang mengboendjamkan kakinja hingga ke Andaloesia*
 「アンダルシアの地にまで足を「打ち込んだ」ターリク・ビン・ズィヤード(…)」
 (Borneo Simboen 中：1944/2/12 第2面)

使役の接尾辞 -kan と、使役動詞を作る *memper-* が組み合わさることも多い。派生される *memper-kan* 動詞は、同じ語基を使った *meN-kan* 動詞とほぼ同じ意味を持つ¹³⁾。

- (12) *memperkoatkan (tenaga perang)* 「(戦力を) 強化する」 = *memper-* + *koat* 「強い」 + -kan
memperloaskan (pertanian) 「(農業を) 広める」 = *memper-* + *loas* 「広い」 + -kan

接尾辞 -i にも他動化の機能があり、主語ないし目的語の状態／位置変化をあらわす。慣用的な意味と結びつくことがある。*meN-* や *memper-* 等によって動詞となる。

- (13) *menoetoepi (kekalahan)* 「(敗北を) 補填する」 = *meN-* + *toetoe* 「カバー」 + -i
mendoedoei (kota) 「(町を) 占領する」 = *meN-* + *doedoe* 「座る」 + -i
memperbaiki (djalan) 「(道を) 修繕する」 = *memper-* + *baik* 「良い」 + -i

接周辞の *ber-an* は相互や多方向性をあらわす動詞を派生する。

- (14) *berbadapan* 「相対する」 = *hadap* 「(向／面)」 + *ber-an*
berdatangan 「色々な所から来る」 = *datang* 「来る」 + *ber-an*
beterbang 「飛び交う」 = *terbang* 「飛ぶ」 + *ber-an*

3.2 接辞添加 II：名詞等を作る機能

接尾辞 -an はさまざまな名詞等を派生する。

- (15) *toelisan* 「書かれたもの」 = *toelis* 「(書)」 + -an
(setjara) besaran 「大規模 (に)」 = *besar* 「大きい」 + -an
Laoetan (Tedoeh) 「(太平) 洋」 = *laoet* 「海」 + -an
minggoean 「毎週の、週一回の」 = *minggoe* 「週」 + -an

接周辞として -an を伴う, *peN-an*, *per-an*, *ke-an* があり, いずれも基本的な名詞を派生する。

- (16) *pemakaian (gas ratjoen)* 「(毒ガスの) 使用」 = *pakai* 「使う」 + *peN-* -an
perloembaan (mengarang) 「(作文) コンテスト」 = *loemba* 「競争」 + *per-* -an
kemenangan (achir) 「(最終的な) 勝利」 = *menang* 「勝つ」 + *ke-* -an

ただし, 接周辞 *ke-an* による派生語の中には, 主に述部として機能するものがある。以下の *kebilangan* 「失う」もその一つである。

- (17) *Australia telah kebilangan 5400 orang djoeroe terbang sedjak petjahnja peperangan.*
「オーストラリアは戦争勃発から 5400 人のパイロットを失った。」
(*Borneo Simboen* 中: 1943/10/17 第 1 面)

接頭辞 *peN-*, *pe-* は行為／性質の担い手や道具をあらわす名詞を派生する。

- (18) *(para) pendengar* 「聴衆 (たち)」 = *peN-* + *dengar* 「(聴)」
(alat) pendengar (radio) 「受信機 (のラジオ)」 = *peN-* + *dengar* 「(聴)」
pemoeda 「青年, 若人」 = *pe-* + *moeda* 「若い」

接頭辞 *se-* にはさまざまな機能がある。「一」をあらわすことが多く, 「同じ」「限り」「直後」をあらわすこともある¹⁴⁾。

- (19) *sepasoeakan* 「一部隊」 = se- + pasoeakan 「部隊」
sebangsa (dengan ...) 「(…と) 同胞の」 = se- + bangsa 「民族」
(dengan) sehabis (tenaga) 「(力の) 尽きるまで」 = se- + habis 「尽きる」
sehabis (latihan) 「(訓練) が終わると」 = se- + habis 「終わる」

現代インドネシア語と同様、接中辞 -em- は、形態論的生産性がきわめて低い。ただし、一部の重複語にしばしば見られる。重複とともに「多様」をあらわす。

- (20) *tali-temali* 「多種のロープ」 = -em- + tali 「ロープ」
(gilang-)gemilang 「きらびやかな」 = -em- + gilang 「輝く」

3.3 接辞添加 III：二段階の添加

2種類の接辞が二段階に添加する場合もある。次の例は、se- が添加したものに (meN-) -kan が添加した例である。

- (21) *menjelaskan (diri)* = selaras 「相応しい」 + -kan
「(自分を) 順応させる」 se- + laras 「一致」
menjesoeaikan (penghidoepan) = sesoeai 「適した」 + -kan
「(生活を) 調整する」 se- + socai 「(合)」¹⁵⁾

ber- 動詞に -kan (および meN-/di-) が添加したタイプもいくつかの例が見られる。

- (22) *diberhentikan (dengan hormat)* = berhenti 「止まる, 辞める」 + -kan
「(名誉) 解任される」 ber- + henti 「(止/辞)」

diberdirikan (*Djo Gakko*) = berdiri 「立つ」 + -kan

「(中学校が) 設立される」 ber- + diri 「(立)」

数は限られるが、方向の前置詞 *ke* 「～へ」と *belakang* 「背後」などの位置名詞が合わさったものに *ter-* が添加するタイプも見られる。

(23) *terkemoeke* 「有名な」 = *ter-* + *ke* 「へ」 *moeka* 「前」

terkebelakang 「後進の」 = *ter-* + *ke* 「へ」 *belakang* 「後」

terkeloeat 「露出した」 = *ter-* + *ke* 「へ」 *loeat* 「外」

(22) の *diberdirikan* は現代ではほぼ使われず、同じ「立てられる」の意味では *didirikan* が用いられる。一方、(23) の *terkebelakang* および *terkeluar* は、現代のインドネシア語ではほとんど用いられず、主にマレー語において用法が確認できる語である。

ほか、*ke-an* 派生語に *ber-* が接頭する、*peN-* 派生名詞に *ke-an* が接尾する等、さまざまな二段階の派生語があるが、煩雑になるためここでは扱わない。

3.4 重複

語基の初頭子音とデフォルトの母音 <e> /ə/ を接頭することで作られる重複語としては、よく使われる *laki* 「男性」以外にも、次のような例が見つかる。

(24) (*seorang*) *djedjaka* 「(一人の) 青年」 = *dje* + *djaka* 「青年」

(*kata*) *pepatah* 「諺 (のことば)」 = *pe* + *patah* 「～言 (一言, 二言 …)」

(*para*) *tetamoe* 「客人 (たち)」 = *te* + *tamoe* 「客」

現代では、特に *jejaka* と *tetamu* の使用はインドネシア語よりもマレー語の

方で顕著である。現代インドネシア語では *perjaka* 「独身男性」という形が用いられる。

語基全体を繰り返して作られる重複語には特別な表記がある。語基の直後にアラビア数字の「2」を後続させて重複をあらわす表記である。この表記の主な目的は、限られた紙面に載せる情報量を変えずにスペースを節約することにある（経済性の原理に従う）。

- (25) *kapal*2 「(複数の) 船」 = *kapal* + *kapal* 「船」
*baroe*2 *ini* 「最近」 = *baroe* + *baroe* 「新しい」
*lebih*2 「まして」 = *lebih* + *lebih* 「より～」
*soedah*2 「過去の」 = *soedah* + *soedah* 「既に」

この表記を使わず、例えば *kapal-kapal* のように全字を繰り返して表記されることも少なからずある。そのような表記には、強調および個別を示す場合や、紙面内のスペース調整の場合があると思われる。

語基全体の繰り返しと接辞添加が組み合わさることもある。

- (26) *teroes meneroes* 「継続的に」 = *teroes* + *meN-* + *teroes* 「続けて」
tolong menolong 「助け合う」 = *tolong* + *meN-* + *tolong* 「(助)」
- (27) *bersama-sama* 「一緒に」 = *ber-* + *sama* + *sama* 「同じ」
selama-lamanya 「永遠に」 = *se-nja* + *lama* + *lama* 「(時間) 長く」
mengkobarkan 「鼓舞する」 = *meN-* + *kan* + *kobar* + *kobar* 「(燃)」

なお、(26) のように、語基がそのまま連続しないタイプ、つまり2つの語基の間に接辞が介在するタイプの重複には、(25) のような「2」による表記が無い（例えば **2meneroes* のような表記は無い）。加えて、(26) のタ

イプの場合、語基をつなぐハイフンが無い場合が多く、(26)の表記と、ハイフンのある *teroes-meneroes*, *tolong-menolong* の間で表記に揺れがある¹⁶⁾。

派生名詞や句／複合語については、語基ではなく、語が繰り返される。

- (28) *pemoeda*2 「青年たち」 = *pemoeda* + *pemoeda* 「青年」
*kemenangan*2 「数々の勝利」 = *kemenangan* + *kemenangan* 「勝利」
*djoeroerawat*2 「看護婦たち」 = *djoeroerawat* + *djoeroerawat* 「看護婦」¹⁷⁾
*djoeroe*2 *rawat* 「看護婦たち」 = *djoeroe*「～の技能者」+ *djoeroe* + *rawat*「(看護)」

上で見たとおり、重複語には「2」による省略表記と、全字による完全表記がある。本来的にどちらの表記をとりやすいかは、重複のタイプによってある程度異なっている。

概して、語基を繰り返すのみのタイプ(25)と、派生語全体を繰り返すタイプ(28)の場合は、「2」による省略表記が多い。特に、(28)のように字数の多い派生語は、全字による完全表記が好まれない(経済性の原理に従う)。

一方、派生語の内部の語基を繰り返すタイプ(27)の場合は、「2」による省略表記よりも全字による完全表記の方が比較的多い。(27)のように字数が多い派生語とはいえ、「どの部分を繰り返したのか」が明らかな表記の方がやや優先されるようである(透明性の原理に従う)。仮に、「2」による表記を施してしまうと、**bersama-bersama* (←*bersama*2), **selama-selamanja* (←*selama*2nja), **mengkobar-mengkobarkan* (←*mengkobar*2kan) 等の、存在しない形式をあらわす余地を与えてしまうからである。とはいえ、これらの非文法的な形式が存在するかしないかは言語使用者にとって自明である。したがって、このタイプにおいて「2」による省略表記が完全に回避されるわけではない。

3.5 複合

明らかな句とは異なり、全体の意味が構成的でない複合語をいくつか以下

に挙げる。

- (29) *gambar hidoep* 「映画」 = *gambar* 「絵」 + *hidoep* 「生きた」
garis depan 「(戦場の) 前線」 = *garis* 「線」 + *depan* 「前」
mata oelang/wang 「通貨」 = *mata* 「目」 + *oelang/wang* 「お金」
sendjata api 「火器」 = *sendjata* 「武器」 + *api* 「火」
pabit getir 「辛苦」 = *pahit* 「苦い」 + *getir* 「渋／苦い」
berbesar moeloet 「偉そうにした」 = *ber-* + *besar* 「大きい」 + *moeloet* 「口」
mendarab daging 「内面化される」 = *meN-* + *darah* 「血」 + *daging* 「肉」
melihat boelan 「(イスラーム暦のため) 新月を見る」
= *melihat* 「見る」 + *boelan* 「月」

複合語の中には、*garis-depan* や *pabit-getir* のように、ハイフンで構成要素をつなぐ表記を見せるものもある。

現代語では *gambar hidoep* は使われず、*film* (ないし *sinema* や *movie*) に置き換わっている。同様に、*pabit getir*, *(ber)besar moeloet*, *melihat boelan* も頻度はきわめて低い。

オランダ語の *hoofd* 「ヘッド」の借用形式 *hop-* を使った複合語も見られる。

- (30) *Hopkadi* 「カーディー裁判長」 = *hop-* 「長」 + *kadi* 「カーディー裁判官」
Hopkomis 「行政長」 = *hop-* 「長」 + *komis* 「行政官」

刈り込み複合語については、以下の 3.6 を参照されたい。

3.6 省略

音、文字を削除することで新たな語、表記を作る操作を「省略」と呼ぶことにする。省略は、経済性の原理に従って生じる、きわめて一般的な現象で

ある。

句ないし複合語において、各構成要素の頭文字を残したイニシャルリズムが見られる。以下のような組織名等のイニシャルリズムには表記上の変異がほとんど無い。

- (31) B. S. 「ボルネオ新聞」 = *Borneo Simboen*
 G. A. B. 「新世代スポーツ (=団体)」 = *Gerakan Angkatan Baroe*
 K. G. S. R. 「國民學校教員養成課程」 = *Koersoes Goeroe Sekolah Rakjat*
 M. I. A. I. 「ミアイ (インドネシア・イスラーム最高協議会)」
 = *Madjlisoel Islamil A'laa Indonesia*¹⁸⁾
 O. D. I. 「インドネシア商業」 = *Oesaha Dagang Indonesia*
 P. K. T. R. 「大東芸術協会」 = *Perhimpoean Kesenian Timoer Raya*
 (*djaman*) B. P. M. 「油泥棒オランダ (の時代)」 = *Belanda Pentjoeri Minjak*

Oesaha「～業」の〈Oe〉は2字1音だが、1字目の〈O〉のみが残される。

以下の地名や尊称のイニシャルリズムには、主に末尾の語句を省略しない表記上の変異がある (*H. Timoer*, *P. Toean*, *T. Besar* など)。このような省略は、使用頻度の高い句にひろく見られ (例: *K(oeala). Kapoeas* 「クアラ・カプアス (地名)」, *W(arta). Berita* 「ニュース」 など), 人名の表記においてはきわめて頻繁に観察される。

- (32) H. T. 「東インド」 = *H(india) Timoer*
 A. T. R. 「大東亜」 = *A(sia) T(imoer) Raja*

特に、尊称は小文字で表記される場合がある。上記の組織名や地名等に小文字表記は無い。S. P. + T. B. のように、イニシャル表記を組み合わせる場合もある。職名も合わせて挙げる。

- (33) *J. M. M.* / *j. m. m.* 「聖上陛下」 = *Jang Maha Moelia*
J. M. / *j. m.* 「閣下」 = *Jang Moelia*
(S.) P. T. / *(s.) p. t.* 「(尊称)」 = *(Seri) P(adoeka) Toean*
T. B. / *t. b.* 「長」 = *T(oean) Besar*
S. B. M. 「大元帥陛下」 = *Seri B(aginda) Maharadja*
P. M. 「首相」 = *Perdana Menteri*

頭文字をピリオドで区切っている（すなわち、SPTB のようには表記しない）ことから分かるとおり、これらはアクロニム（acronym）化しておらず、「単語読み」はなされない。ただし、(31) の *GAB, MLAI* については、ピリオド無しの表記も散見され、マレー／インドネシア語の適切な音節構造をなしているため、すでに「単語読み」されていた、すなわちアクロニム化していた可能性は否定できない。

以下のイニシャル表記は、おおむね小文字で表記され、ピリオド無しの変異を見せる。これらは団体名に冠する点で統語論的に尊称と同様の働きを持つ。ただし、*s. k.* 「新聞」は通常の名詞句として用いられることも多い（例：*dalam s. k. (ini)* 「(この) 新聞 (の中で)」）。

- (34) *p. s.* / *ps.* / *Ps.* (*Dai Nt*) 「蹴球団 (「第二」)」 = *persatoean sepakraga*
s. k. / *sk.* (*Mainichi*) 「新聞 (「毎日」)」 = *soerat kabar*

より機能語的な働きを持つ句も同様に、小文字表記とピリオド無しの変異を見せる。これらのうち、*dll.* と *dsb.* は、現代インドネシア語においても頻繁に用いられる。

- (35) *~ d. l. l.* / *~ dll.* 「～など」 = *dan lain lain* / *dan lain2*
~ d. s. b. / *~ dsb.* 「～など」 = *dan sebagainya*

～ <i>j. a. d.</i> / ～ <i>jad.</i>	「(未来の) 来る～」	=	<i>jang akan datang</i>
～ <i>j. l.</i> / ～ <i>jl.</i>	「(過去の) 去る～」	=	<i>jang laloe</i>
～ <i>j. b. l.</i> / ～ <i>jbl.</i>	「去ったばかりの～」	=	<i>jang baroe laloe</i>
～ <i>j. t. l.</i> / ～ <i>jtl.</i>	「去った～」	=	<i>jang telah laloe</i>
<i>k. l.</i> ～ / <i>kl.</i> ～	「およそ」	=	<i>koerang lebih</i>

上記のイニシャルイズムとは異なり、刈り込み (clipping) による省略表記も多い。特に、前置詞や時間単位等の閉じた類に顕著である。語に含まれる母音字 (および子音字) が刈り込まれ、語内に残るいくつかの子音字を中心として新たな省略表記が作られる。2 字 1 音の <ng> は <g> で代表されることが多く、例えば以下の *dengan* /dəŋan/ や *jang* /jaŋ/ には音素の /g/ が含まれないにも関わらず、それぞれ *dgn.*, *jg.* となる。

(36)	前置詞		時間単位	
	<i>dln.</i>	「～の中」 = <i>dalam</i>	<i>th.</i>	「～年」 = <i>tahoen</i>
	<i>dgn.</i>	「～と／で」 = <i>dengan</i>	<i>bl.</i>	「～月」 = <i>boelan</i>
	助詞等		<i>tg(l).</i>	「～日」 = <i>tanggal</i>
	<i>fg.</i>	「(関係化)」 = <i>jang</i>	<i>pk(l).</i>	「～時」 = <i>poekoel</i>
	<i>tsb.</i>	「(前方照応)」 = <i>terseboet</i>		
	<i>jth./Jth.</i>	「～様 (へ)」 = <i>jang terhormat</i>		

開いた類については名詞に刈り込みが見られる。ただし、*org.* 「(～) 人」と地名を除く全ての刈り込み名詞が、尊称／敬称的な用法を持つ。そのため、他の尊称表記からの類推により、大文字表記の変異を持つものが多数を占める。なお、*njonja* 「夫人」から生じる *nj.* は 2 字 1 音ではあるが、ここではイニシャルイズムではなく、文字上の刈り込みと見ておく (同じ 2 字 1 音の <oe>)

のイニシャル表記として (31) の O. があるため)。

(37)	<i>nj./Nj.</i>	「～夫人」	=	<i>njonja</i>
	<i>p(a)d./P(a)d.</i>	「(尊称)」	=	<i>padoeka</i>
	<i>sdr./Sdr.</i>	「(～) 氏」	=	<i>saudara</i>
	<i>tn./Tn.</i>	「(尊称)」	=	<i>toean</i>
	<i>wk./Wk.</i>	「副～」	=	<i>wakil</i>
	<i>kp(g)./Kp(g)</i>	「(～) 村」	=	<i>kampoeng</i>
	<i>kr(tj)./Kr(tj)</i>	「クロンチョン音楽」	=	<i>k(e)rontjong</i>
	<i>Bjm(asin).</i>	「バンジャルマシン」	=	<i>Bandjarasin</i>
	<i>Bpp.</i>	「バリックパパン」	=	<i>Balikipapan</i>
	<i>Ptk.</i>	「ポンティアナック」	=	<i>Pontianak</i>

以下のものは大文字表記の変異を持たない。

(38)	<i>bg.</i>	「～部」	=	<i>bagian</i>
	<i>bh.</i>	「～語」	=	<i>babasa</i>
	<i>prp.</i>	「女性」	=	<i>perempoean</i>

母音で始まる語の場合、その初頭母音は刈り込まれずに残される。また、特に語頭音節の母音が残される場合がある。

(39)	<i>alm./Alm.</i>	「故～」	=	<i>Almarhum</i>	<i>Angk.</i>	「～軍」	=	<i>Angkatan</i>
	<i>org.</i>	「(～) 人」	=	<i>orang</i>				
	<i>Pangk.</i>	「～基地」	=	<i>Pangkalan</i>	<i>perk.</i>	「(～) 集」	=	<i>perkoempoelan</i>
	<i>pes.</i>	「飛行機」	=	<i>pesawat</i>	<i>tent.</i>	「～軍」	=	<i>tentera</i>

名詞のような開いた類には類似の音素配列を持った語が多い。上の例のように語頭音節の母音が残されることや、高頻度にもかかわらず刈り込まれない名詞が多い理由は、刈り込み表記から原語を同定できなくなるのを防ぐためである（透明性の原理に従う）。

句や複合語の刈り込みも見られる。アクロニムのように単語読みができるよう、音節が残されるという特徴を持つ。末尾に地名が入った刈り込み複合語が一般的であり、サッカー（蹴球）の団体名に多い。以下の *Gasib* においては、原語には無い *i* が現れており、部分的ではあるが原語の表記に忠実でない語形成がうかがえる。

- (40) *Gasib* 「バラバイ蹴球会」 = *G*Aboengan *S*epakraga *B*arabai
Gapedama 「マラバハン商人協同組合」 = *G*Aboengan *P*Edagang *D*Aerah *M*Arabahan
Masjoemi 「マシュミ（インドネシア・イスラーム協議会）」
= *M*Adjelis *S*JOero *M*oeslimin *I*ndonesia
Perdati 「インドネシア煙草産業組合」 = *P*ERsatoean *D*Agang *T*embakau *I*ndonesia
Perseba 「バリックパパン蹴球団」 = *P*ERsatoean *S*Epakraga *B*Alikipapan
Perseka 「カンダンアン蹴球団」 = *P*ERsatoean *S*Epakraga *K*Andangan
Peseban 「パンジャルマシン蹴球団」 = *P*ERsatoean *S*Epakraga *B*ANdjarmasin

以下の語は、日本語の刈り込み複合語である「映配」から借用されたと考えられる。仮に、マレー／インドネシア語内部で *Eiga Haikyu Sya* が刈り込まれたならば、〈ei〉による音節が有標であるため、*Eihai* ではなく *Ehai* のような語が形成されていただろう。

- (41) *Ei Hai* 「映配（社団法人映畫配給社）」 (= *Eiga Haikyu Sya*)

4. おわりに

本論文では、『ボルネオ新聞』のマレー／インドネシア語紙面で使われている言語を対象とし、その綴り、音韻、形態法について実証的な記述をおこなった。結論として、現代のマレー／インドネシア語から遡ることのできる言語を使って、約75年前に『ボルネオ新聞』が発行されていたと断定できる。そのため、現代マレー／インドネシア語の知識による分析も十分可能である。

音韻については、とりわけ借用語において現代マレー語に準ずる母音・子音が使われる場合がある点、語末第三位の音節核音に変異が見られる点を除くと、現代インドネシア語の音韻の知識が通用することが分かった。形態については、接辞添加自体は現代と同様だが、すでに廃れた当時の派生語が散見されることを明らかにした。そのような廃れた語は、重複語、複合語、省略語の中に容易に観察される。また、重複語と省略語については、その省略形式が経済性の原理に従う一方、原語の同定可能性を維持するため、透明性の原理にも一部従っていることを例示した。

省略語においては、「変異があるか」「どのような変異があるか」という基準にしたがって、分類を試みた。この分類基準は、十分な有効性を持っているとはいえ、音韻論的特徴や語類・下位語類等による分類と部分的に平行している可能性がある。これら他の分類基準とどの程度平行するかという点をはじめ、今後のさらなる精密化が必要である。

本論文は、当時のマレー／インドネシア語の出版物で使われる語彙を知るための参照資料的な側面を持っている。ただし、綴り・形態法以外の、例えば統語論的特徴については記述しておらず、また、新聞で使用される語彙に記述が偏っている点是否めない。『ボルネオ新聞』における統語法を記述すること、および新聞以外にも使用されるような当時の語彙を射程に含めることは今後の課題としたい。

注

＊本研究は、2019年度南山大学パッへ研究奨励金 I-B（特定図書）の助成による成果の一部である。Szymon Grzelak 氏、Mangga Stephanus 氏には本論文の草稿にたいして有益なコメントをいただいた。記して謝意を表したい。もちろん、本論文における誤りはいかなるものも筆者のみがその責を負う。

- 1) これら3つの都市の中でバンジャルマシンは「中部」にあたるが、現在のインドネシア共和国においては南カリマンタン州（Provinsi Kalimantan Selatan）の州都であり、中カリマンタン州にあるわけではない。
- 2) ただし、(i) 国立国会図書館の『ボルネオ新聞 東部版』は1943年8月20日～1945年2月9日分が閲覧可能のようである。したがって、以下で述べる早瀬（2018b）に収録されている『東部版』1943年4月29日～1943年12月31日分（第8～10巻）との間には期間のずれがある。
- 3) 通信社史刊行会（1958: 624）によると、軍政下のバタビア（現ジャカルタ）において、同盟通信社がマレー／インドネシア語による「通信」を（邦文の「通信」とともに）発行していた。また、岸・西島（1959: 251-258）および、萩森（1969: 7-8）によると、現地新聞社がマレー／インドネシア語で *Asia Raja*（アジア・ラヤ、元々 *Berita Oemoem*）、*Pembangoen*（ペンバンゲン、元々 *Pemandangan*）を発行していたのに加え、親日華僑系の *Hong Po*（洪報）、およびその後の統合による *Kung Yung Pao*（共榮報、津田 2019）もマレー語版を発行していた。バタビア以外では、*Tjahaja Timoer*（チャハヤ・ティムール、バンドゥン）、*Sinar Baroe*（シナル・バル、スマラン）、*Sinar Matahari*（シナル・マタハリ、ジョグジャカルタ／アンボン）、*Soeara Asia*（スアラ・アジア、元々 *Soeara Oemoem*、スラバヤ）、*Pewartia Selebes*（プワルタ・セレベス、スラウェシ）、*Bali Sinbun*（バリ新聞、バリ）、*Padang Nippo*（パダン日報、スマトラ）、*Palembang Simbun*（パレンバン新聞、スマトラ）等が発行されていた。これらの現地新聞はおおむね日本軍の指導下で発行が許された。ほかにも、萩森（1969: 84-85）によると、軍政監の監督下におかれたジャワ新聞会が1944年9月8日からジャワ語、スンダ語、マドゥラ語を使って新聞半頁の大きさの地方版（週刊）を発行していた。また、通信社史刊行会（1958: 633）によると、日本の有力13社が経営する昭南（シンガポール）新聞会が、メダンで「土語」による「北スマトラ新聞」を発行していた（早瀬 2016: 66-67, 72-73, 77, 80, 93-98 参照）。

- 4) それぞれの題号は、(i)『東部版』では *Borneo Simboen*, (ii)『中部版』では創刊第一週を除いて *Borneo Simboen* (1942年12月8日～12月11日の4日間はヘボン式の綴り *shi* を混せて *Borneo Shimboen* と綴られている), (iii)『西部版』では旧綴りの *oe* を使わない *Borneo-Simbun* となっている。
- 5) *tentera* 「軍」は、現代のマレーシアのマレー語では *tentera*, インドネシア語では *tentara* と綴られる。*Borneo Simboen* では *tentera* の表記が比較的多いが, *tentara* も少なくない。例えば、『中部版』(1944/3/24 や 1944/4/25) および『東部版』(1943/6/22 や 1943/9/9) には同日の紙面に両方の表記が見られる(*tentera* の使用頻度は『東部版』の方が高い)。以上から、当時、*tentera*～*tentara* の間に表記の揺れがあったといえる。
- 6) *mareka* 「彼ら」は、*Borneo Simboen* (東) に数例のみが確認される(1943/6/5, 同 8/21, 同 11/6, 同 11/27)。これに反し、一般的な表記の *mereka* の方の使用頻度は『東部版』ですら圧倒的に多く、4例の *mareka* が単なる誤植である可能性は否めない。
- 7) *keoatir* 「心配だ」は、現代のマレーシアのマレー語では *khuatir*, インドネシア語では *khawatir* と綴られる、アラビア語からの借用語である。*Borneo Simboen* に多い表記は *keoatir* と *chawatir* である。派生語もこの2つを基とし、*mengoeatirkan*, *mengchawatirkan* 「懸念する」や、*kekoeatiran*, *kechawatiran* 「心配」が見られ、表記が安定していなかったことがうかがえる。また、*gembira* 「嬉しい」という語は、『東部版』(1943/5/25 と 1943/7/6) と『西部版』(1944/9/10) の数例で *goembira* と表記されている。加えて、*keliling* 「周り」という語は、『東部版』(1943/5/27 と 1943/6/1) で *koeliling* と表記されている(パンジャルマシン付近に *Rantauan Koeliling* という地名があり『中部版』ではその表記が見られる)。これらのことから、語末第三位の母音 (kOE.a.tir, gOEEm.bi.ra, kOE.li.ling) に、/u~ə/ や /ə~a/ の変異があったことが示唆される。
- 8) *fibak* 「側」は、現代のマレーシアでもインドネシアでも *pihak* と綴られる。一方、*fikir* 「考え」はマレーシアでは *fikir*, インドネシアでは *pikir* と綴られる。*faham* 「理解」もマレーシアでは <f> を使い、インドネシアでは <p> を使う。*Borneo Simboen* におけるこれらの語は、頻度差はあるが <f> と <p> による表記の揺れがある。ただし、派生語では、*memihak* 「味方する」、*memikirkan* 「について考える」、*memahamkan* 「完全に理解する」のように <p> を元としており、<f> を元にした派生語は一般的でない。この点は、現代のインドネシアの表記に

通ずる。ただし、*faedah*「益」の派生語は *berpaedah*「有益な」よりも *berfaedah* の方が一般的であり、これも現代のインドネシアの表記に通ずるものである。

- 9) *insjaf*「自覚した」は、マレーシアでもインドネシアでも <sy> ではなく <s> を使い、*insaf* と綴られる。同様に、(ter)*masboer*「有名な」は、マレーシア／インドネシアで <s> ではなく <sy> を使い、*masyhur* と綴られる。*Borneo Simboen* では、*insjaf*~*insaf*、*masboer*~*masjboer* という表記の揺れがあり、これら借用語において /š~s/ の変異があったと推測される。
- 10) *Borneo Simboen* には、第一音節として <e> を入れた *kesatrya(n)*~*kesatrija*~*kesatria* という表記の揺れと、<e> の無い *ksatrya(n)*~*ksatrija*~*ksatria* という揺れが確認できる。接頭辞の k(e)- を持たない *satrya*~*satrija*~*satria* も同様に表記が揺れる。語基第二音節として <e> を入れた *saterif(j)a* という表記もあり、*Borneo Simboen* (東) の 1943/6/15 紙面の第二面には “*sateria* (*ksatrya*)” と、2 つの形式が記されている。現代のマレーシアでは (ke)*sateria*、インドネシアでは (ke)*satria* と綴られる。
- 11) *Borneo Simboen* において、*tjahja*「輝き」という語基は、*tjahja* と表記される場合がある。例えば、『東部版』(1943/8/14) に “[...] diterangi oleh *tjahja boelan*” 「月光に照らされ」、同 1943/4/29 の紙面に “[...] *Tenno Heika* *jang bertjahja diseloeroeh doenia*” 「全世界に輝く [...] 天皇陛下」とある。ただし、この表記は、ラジオ放送番組欄などの楽曲タイトルがほとんどであり、“*Tjahja Timoer*” 「東の輝き」、*“Tjahja matamoe”* 「君の目の輝き」、*“Opera Tjahja Boelongan”* 「ブロンェンの輝き (オペラ)」などが見られる。
- 12) 人称受動の形式に似た能動構文が見られる。例えば、“*haroes kamoe melatih diri*” 「君は自らを鍛えなければならない」(*Borneo Simboen* 中：1943/10/24)。この構文は、*haroes* 等の助動詞の直後に主語を置く、有標な口語的構文である。無標の、助動詞の直後に述部を置く能動や人称受動の文語的構文 (*kamoe haroes melatih*, *haroes kamu latih*) とは異なる。
- 13) なお、*memperdoelikan* 「注意を払う」という語は、あたかも *doeli* という語基の *memper-kan* 動詞に見える。アラビア語の *fuduli* 「気にする」から借用された *pe(r)duli* (Jones 2007 を参照) を語基とする *meN-kan* 動詞であり、/r/ は類推によって挿入されたと考えられる。
- 14) 接頭辞 *se-* は「全体」をあらわすこともあるが、その使用頻度は比較的低い (*se-Asia Timoer Raya* 「全大東亜」= *se-* + *Asia Timoer Raya/Raja* 「大東亜」(*Borneo Simboen* 中：1944/2/11 第2面))。

- 15) *menjesoeaikan* の *sesoeai* 「適した」は、現代インドネシア語において *se-* と *suai* に分析されず、*Borneo Simboen* においても *se-* と *socai* に分析する裏づけが乏しい。見つかっている数少ない裏づけとして、次の *kita socai* や *menjoeaikan* (=meN-socai-kan) の使用がある：“*kita socai* langgam bahasa Indonesia [...]” 「インドネシア語というスタイルに我々は従う」(*Borneo Simboen* 東：1943/7/27 第2面)；“[...], *jang menjoeaikan* dengan peratoeran [...]” 「(…)法令に合致するもの」(*Borneo Simboen* 中：1943/12/29-30 両第2面)。これらの例から *socai* 「(近接, 合致)」を抽出し得るため、上では *se-* と *socai* を分析可能としている。
- 16) ハイフンの有無による表記の揺れは、*teroes-meneroes*, *tolong-menolong* の重複タイプに限らず、*bersama-sama*, *selama-lamanja* 等の重複タイプにも共通している。ハイフンの無い *bersama sama* は、*Borneo Simboen* (中：1943/1/3；1943/6/16；1944/2/19) (東：1943/5/8；1943/10/21) 等をはじめ、相当量が見られる。ただし、この表記は1944年3月頃から激減し、ハイフンのある表記ばかりになる。同じくハイフン無しの *selama lamanja* もいくつか見られる(*Borneo Simboen* 中：1943/12/10；東：1943/4/29 など)。
- 17) 句ないし複合語の *djoeroerawat* 「看護婦」は、現代語では *juru rawat* のように2要素が分けて表記される。*Borneo Simboen* では、*djoeroe rawat* や、*djoeroe-rawat* という表記も散見される。他にも、*djoeroeterbang* 「飛行士」や *djoeroenarta* 「記者」(および2要素を分けた表記)、その重複形 *djoeroe2 terbang* 「飛行士たち」や *djoeroenarta2* 「記者たち」などがあるが、*djoeroeterbang-djoeroeterbang* のような全字による完全表記は見当たらない。
- 18) M. I. A. I. の非省略表記は *Borneo Simboen* 内には見つからない。土佐林(2017: 22-23, 58)によると、M. I. A. I. が設立された1937年当時、組織綱領には“Al Madjlisoel Islamil A’laa Indonesia (Madjlis Islam Loehoer Indonesia)”と記されているが、一般の表記としては *Madjlis Islam A’laa Indonesia* (M. I. A. I.) がひろく使われたようである。

参考文献

- 岸幸一・西島重忠(編)。(1959)『インドネシアにおける日本軍政の研究』, 早稲田大学大隈記念社会科学研究所刊行, 東京: 紀伊国屋書店。
- 通信社史刊行会(編)。(1958)『通信社史』, [東京]: 通信社史刊行会。

- 津田浩司（監修）. (2019) 『復刻 共栄報 1942 ～ 1945』, 第 1 ～ 32 卷, 東京 : ゆまに書房.
- 土佐林慶太. (2017) 『二〇世紀前半インドネシアのイスラーム運動 : ミアイとインドネシア・ムスリムの連携』, 第 46 卷, ブックレット「アジアを学ぼう」, 東京 : 風響社.
- 富塚秀樹. (2002) 「太平洋戦争下における南方新聞政策 —『ボルネオ新聞』マカッサル支局長・棟尾松治を例として—」『法政論叢』 39(1): 118-132.
- 早瀬晋三. (2016) 「日本占領・勢力下の東南アジアで発行された新聞」『アジア太平洋討究』 27: 61-100.
- . (2018a) 「巻頭言」『ボルネオ新聞』, 第 1 卷, 復刻版, 東京: 龍溪書舎, p. 1.
- . (編). (2018b) 『ボルネオ新聞』, 第 1-13 卷, 復刻版, 南方軍政関係史料, 第 46 号, 東京 : 龍溪書舎.
- 萩森健一. (1969) 『本社 of 南方諸新聞経営 —新聞非常措置と協力紙』, 朝日新聞社史編集室.
- Jones, Russell ed. (2007) *Loan-words in Indonesian and Malay*. Leiden: KITLV Press.
- Ooi Keat Gin. (2011) *The Japanese Occupation of Borneo, 1941-1945*, Vol. 65 of *Routledge studies in the modern history of Asia*. Oxford: Routledge.